

中国、現在の銅の金属工芸

東京藝術大学 美術学部 准教授 前田 宏智



写真1 北京清華大学での研修会

中国では、新時代の社会を築こうと進むなかにあつて、政府の方針として文化面での復興を目指し、伝統を掘り起こし継承発展させようと動いています。我が国での重要無形文化財の伝承事業のように、中国非物質文化遺産伝承人群研修計画という事業が始められています。私もその一環で、北京の清華大学美術学院を中心に、講義や講演、研修会を受け持ち、学術交流を行ってきました。(写真1、2)



写真2 北京清華大学講演会

中央の北京に伝統的な工芸技術が多く見受けられるのももちろんですが、中国は多民族国家であり、周辺の省や少数民族の間、かつての王朝の都であったところにも特徴ある金属制作が続けられています。金銀などの貴金属、鉄、七宝、錫などたくさん素材や背景がありますが、今回は、銅を素材にしている例をいくつか画像とともに紹介していきたいと思えます。

雲南省には、多くの金属工芸や金属産業があります。その代表的なひとつとして、銅や銀の板を素材とした鍛金が盛んに行われて



写真3 雲南省 - 鍛金



写真4 雲南省 - 銀壺

います。新潟県燕市のような産地で、同様に当て金と金鍍を用いて金属板を打ち絞り、銅の器や銀壺(銀瓶)などを生産しています。継ぎ合わせたりせず、一枚の板から器形を制作するところに仕事の重きを置いているようです。また、日本からの移入かと思いますが、木目金(数種類の金属を何層にも重ねて鍛接し、彫りなどを加えながら打ち延べて木目のような模様を表す技法)の制作も行われています。(写真3、4)

民族の流れが重なる部分もありますが、隣のチベット自治区にも鍛金の技法があります。銅を素材に制作されているものは、主に仏像です。伝統的なかでも宗教に裏付けられた表現と制作です。大きいものは、溶接によって接ぎ合わせ、金鍍などで整え成形しています。仏像や光背、台座の細かい装飾的な浮き彫りは、私たちと同じく松ヤニの台に金属板をはりつけ、いろいろな形の鑿(かんな)を用いて打ち出しています。(写真5、6、7)



写真5 チベット自治区 - 観音像



写真6 チベット自治区 - 鑿打ち出し



写真7 チベット自治区 - 仏頭成形

結晶の模様がみられ、独特の技術であると考えられます。材料については自然銅を使うということで、冶金においても興味深いところです。(写真8)

同じく、雲南省には、日本でいう黒味銅でしょうか、烏銅と言われている酸化して黒く美しく発色する銅に彫りを入れ、銀や金を流し込んで模様を表す技法があります。(写真9)

その他では、広東省にも鍛金技法による銅壺制作があり(写真10)、山西省には火鍋などの銅器制作があります。

浙江省には、南宋の時代から続く青銅器制作の技巧が伝承されています。鑄金技法と鍛金技法による造形と、加飾ともつながるような表面処理と着色仕上げを合わせ独自の工夫がされているようです。建築から彫刻、器などと幅広い銅と黄銅による制作が行われています。(写真11)



写真8 雲南省 - 鑄金壺



写真9 雲南省 烏銅



写真10 広東省 - 銅壺



写真11 浙江省 - 銅器

かつて20年ほど前に訪れた中国の印象では、優れた伝統技法の仕事も手工業的な価値の中に埋もれていたものがまだ多かったように思います。教育の現場でも、金属については彫刻が主体となっており、自国の金属工芸の魅力よりも西洋や日本からのものを模索しているようでもありました。

中国の土壌のなかの伝統的な金属の加工技術とその制作があらためて見いだされ、社会的に大きな意義をもって迎えられる状況はとても好ましく感じています。上代の我が国に大陸から伝えられた技術が芽吹き、独自の工芸が醸し出されたように、中国の金属工芸全体がさらなる美術の高みに向かうことを期待しています。

東京藝術大学
美術学部 准教授
まえだ ひろとみ
前田 宏智



吉林藝術学院での講評会

石川県生まれ、金沢美術工芸大学卒業後、大学院にて工芸研究科デザイン専攻を修了。金沢美術工芸大学、金沢卯辰山工芸工房、東京藝術大学にて教鞭を執り、現在は東京藝術大学美術学部准教授。美術工芸振興佐藤基金により、イギリス・デンマーク・ドイツ・フランス・オランダにて研修。日本工芸会会員、日本ジュエリー協会会員、受賞歴多数。